

こんにちは！ 室長の工藤です。

青森市は来年市制施行120年を迎えます。市制施行にあたっては、当時の青森町は「市」となるための基準に満たなかった人口の問題がひとつの大きな課題となり、隣接する村々と合併することでそれを克服しました。今回は、都市として青森が急速に大きくなっていく時期に起きたひとつの合併問題をご紹介します。

大正の末頃のこと、青森市に隣接する滝内村・大野村・筒井村・造道村との合併が市会で議論されていました。ただ、この時の合併はそれぞれの村を丸ごと合併するのではなく、隣接する「字」を単位としての合併することを青森市は企図していました。ですから、各村で対応は分かれ、この案を受け容れた滝内村では字沖館と新田、造道村では字造道と八重田が昭和2年（1927）に合併しますが、全村合併を望む大野村や筒井村は合併には至りませんでした。

しかし、4年後の昭和6年、大野村と青森市との間で再び合併問題が浮上します。大野村の字金沢と片岡を青森へ合併しようというのです。当時の新聞が報じるによれば、これらふたつの字に住む子どもたちは無償で青森市立の学校に通っていたのですが、今後は児童委託料を徴収するという意向を青森市は示したというのです。そもそも市立古川小学校は、大野村内にあったのにも関わらずです。



大野村内にあった古川小学校
（「昭和二年 青森市勢一覧」、歴史資料室蔵）

※地図上に青い線で示したのが市町村界。赤い丸で示したのが古川小学校。

青森市と合併するのであれば全村合併を望んでいた大野村では、児童委託料を予算化する方向でいたのですが、県と市を交えて協議を重ねた結果、補償金やインフラ整備といった点で折り合いがついたようで、ついに金沢と片岡の2字を合併させることで落ち着きました。また新聞報道によれば、合併の背景には、青森市・大野村ともに「経費節約」「財政上の問題」があったようなのです。昭和6年といえば「昭和恐慌」と呼ばれる深刻な経済危機の真っ只中であつたのに加え、東北地方の農村は大凶作に襲われた年でもありました。こうした社会不安などが、大野村をして部分合併やむなしという方向へと舵を切らせたのでしょう。

ただ、大野村としては基幹産業を担う両字の「水田地区」の合併は、村の存立を危うくするものとして拒否したために県と対立する場面もありました。その後の協議の経過は分りませんが、結果としては両字をともに南北ふたつに分割して、北側を青森市に合併させることになり、翌年6月1日に合併の運びとなったのです。

もちろん、合併により子どもたちの「児童委託料」は徴収しないと、北山一郎青森市長は新聞の取材に答えています。



合併後の青森市と大野村の境界
(「昭和六年 青森市勢一覧」、歴史資料室蔵)
※赤い丸で示したのが古川小学校。